

# 人間の根源に潜む暴力

## —ハインリヒ・フォン・クライストの『拾い子』について—

岡 本 雅 克

ハインリヒ・フォン・クライストの短篇小説『拾い子』は、1811年に出版された物語集第二巻の中に取められ、同時代の人々の反感を呼び起こした。例えば、グリム童話を編纂したことで知られるグリム兄弟の弟ヴィルヘルム・グリムは、この作品を「激しい欲望と悪魔のような悪意の、この上なく陰惨で身の毛のよだつ描写」<sup>(1)</sup>と評している。本稿の目的は、悪や欲望といった問題に焦点を当てながら、道徳的な評価を越えたところで、主人公ニコロの再評価を試みる一方で、人間存在の根源に潜む暴力性を浮き彫りにすることにある。

### 1. 暴力の根源性

モリエール、レッシング、古代ローマの作家ヒュギーヌスのモチーフを自由に用いたとされる『拾い子』の冒頭は、クライスト短編に特徴的なカタストロフ（疫病の猖獗）によって始まる。ローマの商人アントニオ・ピアーキは、息子のパオロを連れてラグーザへ商用の旅に出かける。ところが、そこでは「ペストのような疫病」(199)が発生しており、息子の身を案じたピアーキは、すぐに引き返そうとする。しかし、ピアーキは郊外で一人の少年と出会う。ニコロという名前のその少年は、自分が病気に感染しており、捕吏に追いかけているので、一緒に連れて行ってほしいと嘆願し、ピアーキの手を握り締めるが、ピアーキは、最初の「恐怖」(199)のあまり、ニコロを突き放そうとする。だが、その瞬間にニコロが気を失って倒れたので、ピアーキに「同情の念 Mitleid」(ebd.)が呼び起こされる。ジャン＝ジャック・ルソーが、人間の魂の内にある、理性に先立つ二つ

の自然的感情は、自己保存のための「<sup>アムール・ド・ソア</sup>自己愛」と「<sup>ビチエ</sup>憐れみの情」であり、「他人が苦しんでいるのを見てわれわれが、なんの反省もなく助けにゆくのは、この憐れみのためである」と言う<sup>(2)</sup>ように、「疫病」に対するピアーキの恐怖心は、「同情の念」に取って代わられる。しかし、暴力という観点から、ピアーキのニコロに対する反応を捉え直してみると、ニコロが感染している「疫病」は、死の危険を孕んだ暴力的なもの<sup>(3)</sup>であるがゆえに、それに対する恐怖は、ピアーキにニコロを突き放そうとする突発的な暴力を誘発するのであり、また、ニコロが気を失って倒れることによって、その暴力は「同情の念」に取って代わられるのであって、理性以前の二つの自然的感情を、「<sup>アムール・ド・ソア</sup>自己愛」と「<sup>ビチエ</sup>憐れみの情」であるとする啓蒙思想家ルソーの言葉を、人間は、理性的な選択以前に、自らの選択を正当化できないかたちで、暴力か理性かの選択を同時に迫られた存在である、と言い換えることができるだろう<sup>(4)</sup>。また、ニコロが感染している「疫病」は、ピアーキの息子パオロに死をもたらすばかりでなく、ピアーキに突発的な暴力を誘発するのであり、ここで暴力の伝染性までもが浮き彫りになる。このように、暴力が伝染によって特徴づけられるということは、人間の意志を越えたところで、暴力が人間存在に深く根差していることをうかがわせるものにほかならない。

## 2. 悪および欲望の伝染

しかし、伝染するのは暴力だけではない。悪も伝染性のものである。「病気 Übel」から回復し、ピアーキ家の養子となったニコロは、「信心ぶること」と「女性への愛着」という「<sup>アムール・ド・ソア</sup>悪癖 Übel」を身に帯びる(200ff.)。ドイツ語の Übel が、道徳的な意味における「悪」ばかりでなく、「病気」をも意味する<sup>(5)</sup>ように、ニコロの「悪癖」は、病気の様相を帯びる。ピアーキは、「厳しい要請」によって、ニコロと「僧正の側女」であったクサヴィエラとの関係を断とうとするが(201)、これは隔離の身振りであり、またニコロは、「悪癖」の源泉を塞ぐために結婚させられるが(201f.)、これは治療<sup>(6)</sup>の身振りにほかならない。

それゆえ、ニコロの妻のコンスタンツェが死ぬと、彼は、「信心ぶること」と「女性への愛着」という二つの情熱に、再び門戸を開くことになり(205)、再び「悪癖」

を身に帯びることになる。コンスタンツェがまだ埋葬されていないある日の夕方、家の中で、クサヴィエラの侍女と鉢合わせになったピアーキは、彼女から、逢い引きを熱望するニコロの手紙を、「半ば策略で、半ば力づくで halb mit List, halb mit Gewalt」奪い取る(205)。「策略」も道徳的な観点からすれば悪である<sup>(7)</sup>。病気のかたちをとったニコロの悪は、「正直な」(206)ピアーキにも伝染し、「暴力 Gewalt」のかたちをとった「策略」を誘発する。ニコロの「疫病」が発動させたピアーキの暴力は、「同情の念」に取って代わられた。そしてピアーキは、ニコロを、「払った犠牲が大きかっただけに、いっそう愛するようになった」(201)ので、彼を養子にする。しかし、悪の伝染と同時に、ピアーキの愛情も、ここで暴力へと反転しているのが見て取れる。そしてピアーキは、クサヴィエラの手紙を偽造する。

ピアーキは、腰を下ろし、筆跡を偽り、クサヴィエラの名前で、「すぐに、日暮れ前に、マクダレーネ教会で」と返事を書いた。——彼は、この紙片を、見慣れぬ紋章で封印し、あたかもその女から来たかのように、ニコロの部屋に持って行かせた。この策略 List はまんまと成功した。(205)

ピアーキのこうした「策略」は、それによって侮辱されたニコロに、ピアーキの目をくらすための「手練 Kunst」(206)を誘発するばかりでなく、エルヴィーレに対する「燃えるような憎しみ」(ebd.)を呼び起こし、彼女を欺くための「詐術 Betrug」(212)をも誘発する<sup>(8)</sup>。ジェノバの騎士の格好をしてエルヴィーレを暴行しようとする、ニコロの「詐術」を用いた「悪事 Büberei」(213)は、彼女に死をもたらす暴力的なものであるがゆえに、ピアーキの暴力を誘発する。

このように、暴力や悪は伝染性のものとして特徴づけられている。しかし、伝染するのは暴力や悪だけではない。欲望も伝染性のものである。ピアーキ家の養子となったニコロは、欲望の伝染によって形づくられる欲望の磁場に足を踏み入れることによって、悪(癖)を身に帯びることになるのだが、そのことについて論じる前に、義母エルヴィーレに対するニコロの欲望がいかにして生起するか、見てみることにする。

マクダレーネ教会での出来事は、ニコロにエルヴィーレに対する「燃えるような憎しみ」を呼び起こす。彼は、クサヴィエラの侍女と一緒にいるところをエルヴィーレに目撃されており、ピアキが彼に加えた侮辱は彼女のせいである、と思ひ込んだからである。だが、エルヴィーレがニコロの部屋に入ろうとした時、彼は彼女の美しさに気づく。

ニコロは、あの侍女がいた部屋を開けてまた閉め、彼の破滅を招いたあの瞬間ほど、エルヴィーレを美しいと思ったことはなかった。頬をかすかに紅潮させた怒りは、彼女の穏やかな、めったに激情に動かされることのない面差しに、限りない魅力を注いだ。あれほど誘惑的であるのに、その花を手折ることを彼女に手ひどく罰された道に、彼女みずから時折さまよい出ることがないとは、彼には信じがたく思われた。(206)

エルヴィーレの「魅力」に気づいたニコロは、彼女の情人の存在を想像し、「彼女が自分にしたのと同じお節介を、ピアキ老人のところに行って彼女にもしてやろうという欲望」(ebd.)に燃える。ところが、彼女が部屋の中で肖像画を礼拝していることを知った時、そこに描かれているのが誰なのか知りたいという「好奇心」が、彼の中で「悩ましく *peinlich*」、「燃えるように激しく」なり、彼は「心の動揺」に陥る(207f.)。 *peinlich* が、「心を悩まし、不安にし、締めつけ、苦痛を与える(責めさいなむ) 動揺で満たすような(…)」<sup>(9)</sup> という意味を含み持つことを考え合わせると、肖像画の介入によって、ニコロの「復讐欲」(209)に「情欲」(ebd.)が入り込んでくることが見て取れる。ニコロのエルヴィーレに対する欲望は、肖像画とニコロの類似性に気づいたクサヴィエラの娘クララの「あら、まあ！ニコロさん、これはあなたじゃないかしら」(208)という一言によって、「復讐欲」に取って代わるかに見える。しかし、彼の欲望の生起は、彼自身無自覚なかたちで、クララの一言に先行するのだ。ルネ・ジラルルによれば、欲望は、主体と対象とを結びつける直線で表現されるようなものではなく、欲望する主体と、欲望される対象のほかに、欲望の媒体が存在し、媒介作用によって、主体には媒体の欲望と同じ欲望が呼び覚まされる<sup>(10)</sup>。ニコロが、肖像画、あるいは、そこに描かれた「未

「未知の男」(207)を媒体として、この「未知の男」の欲望を模倣することによって、ニコロにも、それと同じ欲望が生み出されることになる。ニコロの欲望は、それと張り合う欲望を想定することによって生起するのであり、彼は、三角形をした欲望の磁場において、肖像画に描かれた「未知の男」の欲望を欲望するのだ。

ここで、もう一つの欲望の三角形について考察しなければならない。クサヴィエラが肖像画とニコロの類似性を認めた時、彼女の胸に「嫉妬」(208)の感情が兆す。彼女の「嫉妬」は、エルヴィーレを自分の欲望の対抗者として捉えることによって呼び起こされる。しかし、ここで明確なかたちをとって顕在化するエルヴィーレ、クサヴィエラ、ニコロという三角形は、それ以前から潜在的に形づくられている。

母は、ニコロの胸中に早くも呼び起こされたように思われる女性への愛着以外に、非難すべきことはなかった。というのも、彼は、すでに十五歳の時、修道士訪問の際に、僧正の側女であったクラヴィエラ・タルティーニという女の誘惑の餌食になっていたからである。(201)

エルヴィーレは、ニコロの「女性への愛着」について非難すべきことがあった。そうした背景があつてのことと推測されるが、クサヴィエラは、ニコロとの関係における「あらゆる困難」(208)をエルヴィーレの仕業であると執拗に捉え、彼女を失脚させようと目論む。「クサヴィエラは、イタリアの貴族の間で顔が売れていることを自慢にしている」(ebd.)ような虚栄心の強い女であり、「僧正の側女」であったクサヴィエラは、「美德の鑑」(209)であったエルヴィーレに対する対抗心から、彼女の養子のニコロを誘惑するのであり、また、ニコロが気づいたようなエルヴィーレの「魅力」を認めているがゆえに、エルヴィーレを自分の欲望の対抗者として捉え、嫉妬するのである<sup>(1)</sup>。

クサヴィエラの対抗心は、エルヴィーレを、ニコロとの関係の妨げとなる存在として仮想するだけではない。ニコロに対するエルヴィーレの欲望を推測することによって、クサヴィエラの「嫉妬」の感情が誘発されるように、エルヴィーレの「魅力」を認めているクサヴィエラの対抗心は、自分の欲望と張り合うような

欲望を彼女に想定し、ニコロの欲望を自分の方へ向けさせようとする<sup>(12)</sup>。エルヴィーレは、クサヴィエラの欲望の媒体であり、クサヴィエラは、自らが推測したエルヴィーレの欲望を模倣することによって、ニコロを欲望するのである。

ニコロに対するクサヴィエラの欲望は、媒体であるエルヴィーレを介して生起し、クサヴィエラはニコロを「悪癖」へと誘惑する。このようにニコロは、彼がピアキ家の養子となることによって形づくられる三角形をした欲望の磁場において、「悪癖」を身に帯びることになるのである。また、この欲望の磁場は、エルヴィーレの礼拝対象である肖像画の介入によって増殖し、エルヴィーレに対するニコロの欲望が生起する。ニコロの欲望も、その主体に根ざしたかたちで生起するのではなく、媒体である肖像画（に描かれた「未知の男」）を介して伝染するのである。

このように、欲望も伝染によって生起し、欲望の磁場において身に帯びた悪も悪疫のように伝染し、欲望の磁場は増殖していく。こうして悪も欲望も、自己同一的な主体から引きはがされ、作品空間の中で、それ自体が展開していく動的な運動の中へ、登場人物たちを巻き込んでいくことになるのである。

### 3. エルヴィーレのコリーノ礼拝

エルヴィーレの日常は、ピアキの「貞節で優れた」(202)妻としての生活と、亡き恋人コリーノの肖像画への愛の礼拝という二つの領域から構成されている。それは、空間的には、ピアキの家とエルヴィーレの部屋という二つの領域に当てはまる。エルヴィーレは、ピアキの妻として社会的生活を送る一方で、彼女の部屋の中に置かれた肖像画の前に跪き、「恍惚」の姿勢で、命の恩人である亡き恋人の名前を「愛の声音で」囁く(207)。また彼女は、就寝前の礼拝では、服を脱ぐのを常としている(212)。このように彼女の部屋は、彼女の欲望がむき出しになる空間である。この二つの領域は、通常は完全に切り離されているばかりでなく、ピアキとの結婚生活とは相容れないエルヴィーレのコリーノ礼拝は、彼女の「持続的で精神的な姦通」<sup>(13)</sup>を予感させる。エルヴィーレとピアキとは30歳以上の年の差があり、彼女は「もはやこの老人から子供をもうける見込

みがなかった」(201)ばかりでなく、彼女が結婚直後に「激しい熱病」(203)に罹ったことは、ピアーキに対する彼女の「拒絶」<sup>(14)</sup>を推測させる。また、彼女がコリーノのことにに関してカルメル会修道院に「懺悔」(211)に通っていることも、彼女のピアーキとの結婚生活の形骸化を予感させる。

ピアーキは、(…)エルヴィーレの前でその青年の名前を口にしたり、そのほかにも青年のことを想起させたりしないよう、非常に用心していた。なぜなら彼は、それが彼女の美しい、繊細な心をひどく動揺させる、ということを知っていたからである。青年が彼女のために苦しみ死んだ当時のことを遠まわしにでも想起させるようなどんなわずかなぎっかけであっても、彼女をいつも動揺させて涙ぐませ、そんな時は慰めようも、宥めようもなかった。(203)

エルヴィーレは、外部から遮断された自分の部屋の中で一人でコリーノのことを思い出す場合、「恍惚」となるのに対して、外部からの働きかけによってコリーノのことを思い出す場合、非常に動揺させられる。こうした相違は、プラトンが提起した「記憶」と「想起」の対立、つまり、「自分で自分の力によって内から思い出すこと」と「外から思い出す」ことの対立<sup>(15)</sup>に対応しているかに見える。しかし、プラトンによって対立関係にあるとされた「記憶」と「想起」の働きは、むしろ不可分の関係にある、とジャック・デリダが指摘する<sup>(16)</sup>ように、エルヴィーレは、自分でコリーノのことを思い出す場合にも肖像画を必要としており、彼女の「追憶」<sup>(17)</sup>は、外部からの想起と緊密に結びついている。

エルヴィーレは、一方的な外部からの想起によって動揺させられてしまうがゆえに、部屋の中で一人でコリーノへの「追憶」に浸ろうとする。しかし、彼女の「追憶」は、肖像画による想起と緊密に結びついているばかりでなく、それによってあまりにも深く侵蝕されているがゆえに、彼女には肖像画とジェノバの騎士の仮装をしたニコロを見分けることができなくなる。

またエルヴィーレは、他人が彼女の前でコリーノの名前を呼ぶことによって、つまり、一方的な外部からの想起によって動揺させられる一方で、彼女は、礼拝

の際に、肖像画にコリーノと囁きかけるのであり、彼女の礼拝は、コリーノという発話と結びついている。デリダが、ある人の固有名詞を口にすることは、その人の名前を差異の体系の中に書き込み、その人の固有性を抹消する、と述べている<sup>(18)</sup>ように、エルヴィーレは、コリーノという固有名詞を口に出すことによって、亡き恋人の固有性を剥奪する。彼女によって発話される固有名詞は、その本人の固有性を保障するものではないからである。また、肖像画による想起によってあまりにも深く侵蝕された彼女の「追憶」も、肖像画に描かれた亡き恋人の固有性をむしろ曖昧なものにしてしまう。コリーノ礼拝が彼女の部屋の中で行なわれることによって隠蔽されていた、固有性を剥奪するこうした契機は、カーニバルからジェノバの騎士の仮装のまま帰宅したニコロが彼女に衝撃を与える時、また、ニコロが彼女のコリーノという声を COLINO という文字として刻みつける時、明るみに出る。そして、後者の場合、固有性は二重の意味で剥奪される。すでに述べたように、エルヴィーレが口にするコリーノという固有名詞は、その本人だけに該当するものではないというばかりでなく、ニコロは、COLINO という名前を NICOLO という名前の文字の置き換えから形づくることによって、彼女が肖像画に囁きかけるコリーノという名前には自分の名前が隠されている、と誤解するからである。

フェルディナン・ド・ソシュールのアナグラムに関するジャン・スタロバンスキーの論文の表題によれば、アナグラムは「語の下に潜む語」<sup>(19)</sup>である。ニコロ、エルヴィーレ、肖像画という三角形をした欲望の磁場において生じた、義母エルヴィーレに対するニコロの欲望は、家族関係の中では禁じられた欲望にほかならない。だが、こうした意識下に抑圧された欲望は、COLINO - NICOLO というアナグラムの発見によって増幅する。そしてニコロは、自分こそが彼女の礼拝対象であると誤解するばかりでなく、こうした誤解から生じた「恥辱」(212)も相俟って、ジェノバの騎士の格好をして彼女を暴行しようとし、その結果、彼女に死をもたらすことになる。しかし、ニコロに彼女を殺害する意図はなく、彼女を死に至らしめる「激しい熱病」(214)は、ピアーキとの結婚生活とは相容れない彼女のコリーノ礼拝に、その一因があるのであり、彼女の礼拝形式に内在している、コリーノという固有名詞を持つ人間の固有性を剥奪する契機、および、肖



像画に描かれた人間の固有性を剥奪する契機を、暴力的なものとして顕わしめるニコロは、秩序の抑圧された側面を外在化する機能を併せ持っているのである。

#### 4. ニコロとトリックスター

ニコロは、法的・倫理的に設定された家族関係と、その外延的な部分との間を流動的に移動する。この外延的な部分は、父の非難的であった「カルメル会修道士たちとの交際」(201)、また、母の非難的であった「女性への愛着」として示される。ニコロは、日常と非日常の間を行き来する、境界性を帯びた存在にほかならない。<sup>(20)</sup>

ある時ニコロは、「父の禁止」(203)を侵犯し、クサヴィエラとカーニバルに出かけ、ジェノバの騎士の仮装のまま帰宅する。このニコロの姿を見たエルヴィーレは、驚愕して倒れる。仮装したニコロは、彼女にとって亡き恋人コリーノの蘇りであり、「幻想」(208)と現実、あの世とこの世の境界に立つと同時に、コリーノの分身(ドッペルゲンガー)として両義性を帯びた存在となる。

境界性・両義性を帯びたニコロは、エルヴィーレの生の隔絶された二つの領域<sup>(21)</sup>の間に亀裂を入れ、一つの生の領域に、もう一つの領域を導入する媒体としての役割を果たす。こうした機能を帯びたニコロの背後に、異質な領域の境界にあって、それらを媒介するトリックスター<sup>(22)</sup>の姿がほの見えてくる。

神話的形象としてのトリックスターが、策略をめぐらすいたずら者であるように、ニコロを特徴づけているのも狡猾さである。ニコロが用いる「手練」や「詐術」についてはすでに触れたが、こうした狡猾さは、カーニバルからジェノバの騎士の仮装のまま帰宅したニコロが、倒れたエルヴィーレを助けに駆けつけようとする場面、すなわち、彼が、ピーアキに叱られるという不安から、彼女の腰から鍵束を引きちぎり、鍵穴に合うのを見つけると、鍵束を投げ返して姿を消し、ガウン姿で戻って来て、集まって来た下人たちに何が起こったのかと訊ねる場面や、「全財産の譲渡証」(213)を持ってカルメル会修道士たちのもとへ駆け込む場面においても見られる。ニコロが駆使する狡猾さは、状況の不断の変化に応じる柔軟さを具えている。

また、トリックスターが、策略を駆使して秩序を攪乱し、秩序の中の抑圧された側面を顕在化させるだけでなく、それを担って秩序の外へ放逐されるように、ニコロも、ピアーキ家の硬直した倫理的秩序に混乱を与え、エルヴィーレの生の隔絶された二つの領域を媒介し、また、ピアーキの暴力を外在化させると同時に、それを担って排斥される。語り手は、ニコロを「極悪人」(213)と呼ぶ一方で、彼の「無垢」(199)および「悪意のない」(204)身振りについても言及しており、ニコロが一方的に家族の崩壊を惹き起こすというわけではなく、彼が養子として足を踏み入れる家族関係の中にも、無秩序へと向かう契機が内包されているのであり、ユングによって「あらゆる点で未分化な人間の意識の忠実な模写」<sup>(23)</sup>と解釈された神話的な姿として形象化するニコロは、道徳的な評価を超えたところで、悪を相対化する視点<sup>(24)</sup>の導入を可能にすると同時に、ニコロを悪の権化とする従来の解釈<sup>(25)</sup>を疑わしいものにするのである。

## 5. 譲渡行為

ピアーキは、ニコロがジェノバの騎士の格好をしてエルヴィーレを暴行しようとする現場を取り押さえた時、彼女の言葉に「無言となり」、壁から鞭を取って、ドアを開けて外を示す(213)。ここで「ピアーキは、エルヴィーレの言葉によって惹き起こされた受動的な憤慨の無言から、権力行使のかたちとしてのニコロとの対話の拒絶へと移行する」<sup>(26)</sup>と解釈するアンソニー・スティーブンスは、沈黙あるいは対話の不在と暴力との関係に着目し、『『拾い子』の筋の経過の中には、三人(ニコロ、ピアーキ、エルヴィーレ)のうちの二人の主人公の間の率直な話し合いが、破局を回避しえたかもしれないいくつかの瞬間が存在する。真の対話が不可能であったところでは、暴力が凱歌をあげる(括弧内引用者)』<sup>(27)</sup>と結論づけている。ピアーキの沈黙に着目してみると、それが、受動的なものであれ、能動的なものであれ、暴力の発動と背中合わせになっていることを予感させる。鞭を取るピアーキの「無言の身振り」<sup>(28)</sup>に対して、ニコロは、「老人こそ、この家を明け渡さなければならない。なぜなら、完全に有効な書類によって、自分こそが所有者であり、この世のいかなる人に対してであろうと、自分の権利を主張

することができるからだ」(213)と言い放つ。「この前代未聞の厚顔無恥」に対して、ピアーキは、即座に法律顧問のもとへ駆けつけるが、「一言も発しないうちに」意識を失って倒れてしまう(ebd.)。ピアーキによるニコロの殺害も、事が起こってから「家にいた者たち」(214)が気づくように、無言のうちにこなわれたと推測される<sup>(29)</sup>。ピアーキの沈黙は、ニコロを殺害する時に顕わになるような暴力と背中合わせであり、つねに暴力に反転する可能性を秘めているのである<sup>(30)</sup>。

ピアーキは、「法に則って」(202)全財産を譲渡したのであるから、自分の所有権を主張するニコロの言葉は、法に適っている。しかし、孤児のニコロを養子にし、彼に全財産まで譲渡したピアーキにとって、ニコロの言葉はまさに寝耳に水である。エルヴィーレと共に隠退したにもかかわらず、鞭を取って家長としての権力を行使しようとするピアーキが、ニコロとの間に仮想している関係は、交換の原始的な形態である贈与行為における贈与者と受贈者の関係を思い起こさせる。受贈者に返礼を強制させる力について考察したマルセル・モースによれば、贈り物は、受贈者の手に渡った場合にも、贈与者に属するように見做される<sup>(31)</sup>。また、贈与行為において贈与者には優越性が付与される、というモースの見解を受け継いだ今村仁司は、贈与者と受贈者との間の「優位関係のアスペクトは、けっして腕力や暴力の関係ではないが、気前のよさという没利害の外観を装う力関係である。それは暴力を抑える行為であり、暴力圧力にとって代わり、暴力を抑制する意味では、それはいわば暴力の代理でもある」<sup>(32)</sup>と述べ、贈与行為において形成される優位関係が孕む暴力を指摘している。ピアーキが、ニコロを殺害する時、彼の財産所有を確認する政府の「決定書」(214)を口の中に押し込むことから、ピアーキの譲渡行為には暴力が潜んでいることが明らかとなる<sup>(33)</sup>。

エルヴィーレを暴行しようとするニコロの「詐術」を用いた「悪事」は、彼女に死をもたらす暴力的なものであるがゆえに、また、ニコロは、譲渡された財産の返還を拒むがゆえに、ピアーキの暴力を誘発する。このように、ニコロを殺害するピアーキの暴力は、エルヴィーレの死と全財産の喪失という「二重の苦痛」(214)によって発動するのである。ニコロの「疫病」が発動させたピアーキの暴力は、「同情の念」に、愛情に取って代わられた。そしてピアーキは、ニコロを養子にし、全財産まで譲渡する。しかし、暴力に取って代わった「同情の念」や

愛情が、つねに暴力に反転する可能性を秘めているように、ピアーキの譲渡行為も暴力を孕んでおり、ニコロが財産の返還を拒絶することによって、譲渡行為に取って代わられた暴力が、ピアーキに発動することになる。このように、「同情の念」、愛情、譲渡行為と背中合わせの暴力は、人間存在の根源に潜む暴力性を照射するのである。

## 6. ピアーキのむき出しの暴力

クサヴィエラと「カーニバル Karneval」に出かけ、ジェノバの騎士の仮装のまま帰宅したニコロは、エルヴィーレに衝撃を与える。語り手が、何気ない様子で、だが、三度にわたって言及する「カーニバル」(204, 208, 212)は、1788年1月に催された「ローマのカーニバル」に関するゲーテの記述<sup>(34)</sup>からも窺えるように、中世・ルネッサンス期の民衆的祝祭としての面影を色濃く残すものであった。カーニバルが文学に与えた影響、つまり、「文学のカーニバル化」について論じたミハイル・バフチンは、「カーニバル的世界感覚」に特有なカテゴリーとして、「人間の相関関係の新しい様態」を作り出す「自由で無遠慮な人間同士の接触」、「常軌の逸脱」、「ちぐはぐな組み合わせ」、「卑俗化」を挙げている<sup>(35)</sup>。ジェノバの騎士の仮装をしたニコロとエルヴィーレとの関係において、こうしたカーニバル的カテゴリーの現れが見て取れる。この両者は、日常的な関係を脱して新たな関係に入るからであり、エルヴィーレは、「神のように崇拜する」(209)「英雄」(202) コリーノとニコロを取り違えるばかりでなく、変装してエルヴィーレを欺こうとするニコロは、「救助者」と「破滅者」という両義性<sup>(36)</sup>を帯びるからである。

また作品の結末で、飽くことを知らない殺人者となったピアーキの言葉や身振りは、常軌を逸したものとなり、その結果、逆説性が導入される。ピアーキは、ニコロの頭を壁に押しつぶし、彼の口の中に「決定書」を押し込むだけでは飽き足らず、教皇領には「いかなる犯罪者も罪の赦免を受けないうちは死に導かれえないという法」があるにもかかわらず、「罪の赦免」を頑なに拒絶し、ニコロに復讐をやり直すために、「地獄のどん底」へ落ちて行こうとする(214)。こうしてピアーキは、犯罪者は「罪の赦免」が与えられることによって「聖餐」を受ける

ことができる、という教会側が提示する「救済」の論理とは正反対の論理を導入することになる (ebd.)。こうした逆説性は、ピアーキが両手を高く上げる「憤怒の身振り」(215)において頂点に達する。ピアーキは、自分を地獄に行かせようとしないう「非人間的な法」を呪って、「悪魔の群れ」を呼び寄せるからである (ebd.)。「カーニバル的生とは通常の軌道を逸脱した生であり、何らかの意味で《裏返しにされた生》《あべこべの世界》(monde à l'envers)である」<sup>(37)</sup>とバフチンは言っているが、カーニバルという逆さまの世界を体現するのがしばしば道化であるように、ニコロに「愚か者 Narr」<sup>(38)</sup>(214)呼ばわりされるピアーキも、通常の論理が逆転した世界を現出させるのである<sup>(39)</sup>。

ピアーキの暴力は、法との関連において見た場合、ニコロを殺害することによって、国法を侵犯するばかりでなく、ニコロに復讐をやり直すために「罪の赦免」を拒むことによって、教会法をも攪乱する。このように国法を犯し、教会法の中に決して回収されることのないピアーキの暴力が導入する世界は、法の抑制が取り払われたカーニバル的な世界<sup>(40)</sup>を思わせる。こうした「超極端」へとピアーキを駆り立てるのは、聖職者の側から促される「腹立たしい正義の頹廃」にほかならない<sup>(41)</sup>。政府は、僧正の仲介によって、ニコロの財産所有を確認したのであり、こうして権力を身に帯びたニコロが財産の返還を拒んだことが、ピアーキの暴力を誘発する一因であった。「ピアーキは、この世の倒錯した裁きに対して、絶対的な正義の代弁者となる。(…)神の職を解き、それを自ら引き受ける。神的な正義と個人的な復讐は一つになる」<sup>(42)</sup>と解釈するユルゲン・シュレーダーは、腐敗した権力や聖職者に、神のように正義を行使するピアーキを対置している。暴力と法および正義との関係について考察したヴァルター・ベンヤミンは、「法的暴力(法措定的暴力および法維持的暴力)」を「神話的暴力」と呼び、それに「純粹かつ直接的な暴力」としての「神的暴力」、すなわち、「あらゆる神的目的指定の原理」である「正義」の暴力を対置している<sup>(43)</sup>。ピアーキの暴力と、ベンヤミンの言う「神的暴力」との関係について、ここでは立ち入って論じることはできない。しかし、ピアーキの暴力は、法秩序に内在する暴力とは全く異質なものであるがゆえに、法秩序の彼方にある正義を志向することになるのである。国法を侵犯し、教会法の中に回収されることなく、カーニバル的な世界を導入す

るピアーキのむき出しの暴力は、人間世界を秩序づけている法の地平で機能する暴力よりも、根源的な力の発現として捉えることができるだろう。

## 注

作品からの引用は Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. von Helmut Sembdner. 9. Aufl. München (Hanser) 1993, 2. Band に拠る。以下、同書からの引用は本文中に頁数のみを示す。

- (1) Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen. Hrsg. von Helmut Sembdner. Erweiterte und revidierte Ausgabe, Frankfurt/M. u. Leipzig 1992, S. 395.
- (2) ルソー (本田喜代治、平岡昇訳): 人間不平等起原論 (岩波文庫) 2006、30～31 頁、74 頁参照。
- (3) 今村仁司: 排除の構造 (ちくま学芸文庫) 1992、49 頁参照。
- (4) 哲学 (思考) と暴力の内在的関係を明らかにしたエリック・ヴェーユの説に依拠しながら、今村仁司は、「人間の自由は二つの顔をもつ。理性を選ぶ自由と暴力を選ぶ自由である。二つの自由が切り離されてあるのではなく、人間的自由が理性と暴力の二方向に同時にひっぱられているのである。人間は理性を選択しつつ、同時に暴力をも選択する。理性を選ぶ自由も、暴力を選ぶ自由も、全く同等の権利をもって自己を主張することができる。どちらがより高い、より良い「自由」であるかを言うことはできない。それぞれの自由は自己を正当化することはできない。それぞれの選択は理性的選択以前の選択である」と述べている。今村仁司: 前掲書、40 頁。
- (5) Vgl. Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. Tübingen 1992, S. 915.
- (6) Vgl. Oesterle, Günter: Der Findling. In: Kleists Erzählungen. Hrsg. von Walter Hinderer. Stuttgart(Reclam) 1998, S. 161.
- (7) Vgl. Sanders, Daniel: Handwörterbuch der deutschen Sprache. Achte, neubearbeitete und vermehrte Auflage von J. Ernst Wülfing. Leipzig 1909, S. 418.
- (8) List と Kunst は、本来「知識」および「能力」を意味する類義語であり、また List は、軍略や敵を惑わす「欺瞞 Betrug」をも意味した。Vgl. Trier, Jost: Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes. Von den Anfängen bis zum Beginn des 13. Jahrhunderts. Heidelberg 1973, S. 310ff.
- (9) Sanders, Daniel: a.a.O., S. 502.
- (10) ルネ・ジラルール (古田幸男訳): 欲望の現象学 (法政大学出版局) 2004、1～58 頁参照。
- (11) 嫉妬も、対象、主体、嫉妬する相手といった三重の存在を前提とする。ジラルール: 前掲書、12～15 頁参照。
- (12) エルヴィーレ、クサヴィエラ、ニコロという三角形の形成は、この三人の年齢がさ

ほど違わないことから裏づけられる。エルヴィーレは、十三歳の時、家が火事に見舞われる。彼女を火の中から助け出したコリーノは、その時受けた傷のため、三年後に他界する。クサヴィエラは、ニコロに、肖像画の対象はすでに十二年も前から墓の中で眠っている死人だ、と打ち明ける。つまり、この時、エルヴィーレの年齢は二十八歳である。またニコロは、二十歳でコンスタンツェと結婚し、一年後に妻が産褥で死ぬ。つまり、ニコロは二十一歳位である。十五歳のニコロを誘惑するクサヴィエラは、ニコロより年上であろうと推測される。

- (13) Mann, Thomas: Heinrich von Kleist und seine Erzählungen. In: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. 2. Aufl. Frankfurt/M. (Fischer) 1974, Bd. IX, S. 835.
- (14) Vgl. Hoverland, Lilian: Heinrich von Kleist und das Prinzip der Gestaltung. Königstein/Ts. 1978, S. 163.
- (15) プラトン (藤沢令夫訳) : パイドロス (岩波文庫) 2005、134～135頁。
- (16) Vgl. Derrida, Jacques: Platons Pharmazie. In: Dissemination. Hrsg. von Peter Engelmann. Übers. von Hans-Dieter Gondek. Wien(Passagen) 1995, S. 121f.
- (17) Mann: a.a.O., S. 835.
- (18) ジャック・デリダ (足立和浩訳) : 根源の彼方に グラマトロジーについて (現代思潮社) 2000、上巻 227 頁参照。
- (19) ジャン・スタロバンスキー (金澤忠信訳) : ソシュールのアナグラム 語の下に潜む語 (水声社) 2006。
- (20) ニコロの境界性は、作品の冒頭でも示される。ピアーキがニコロと初めて接触を持つのは、ラグーザの「郊外」(199)、つまり、ラグーザの周縁部分であり、空間的な境界である。ニコロは、ラグーザの内部から外部へと移動するだけでなく、再びラグーザへと送還され、それから再びラグーザの外部へ、つまり、ローマへと向かう。ニコロは、ラグーザの内部と外部の間を往来し、「疫病」を媒介する境界的な存在である。
- (21) エルヴィーレも、ピアーキとの結婚生活と、コリーノの肖像画への礼拝という二つの領域から構成された生を営む、いわば境界的な存在であり、コリーノ礼拝が行われる彼女の部屋は、ニコロが一度も足を踏み入れたことがなかったと推測されるように、家の内部の外部といった特異な位置を占める。作品の中に散見する「鍵 Schlüssel」、「ドア Tür」、「門 Tor」、「開ける öffnen」、「閉める verschließen」といった語群から成る「鍵のモチーフ」は、境界的存在であるニコロとエルヴィーレの両者の境界線との関連において、繰り返し現れてくる。
- (22) 山口昌男は、道化的形象を持つものとして、中世ヨーロッパに起源を持つアルレッキーノと、古典神話の中のヘルメスを挙げ、両者に共通するものとして、「境界性」と「両義性」を強調し、両者のトリックスター的な性格に言及している。山口昌男：道化の民俗学(ちくま学芸文庫)1993、39～172頁参照。レヴィ＝ストロースの解釈によれば、トリックスターの両義的性格は、その媒介機能に由来する。クロード・レヴィ＝ストロース (荒川幾男、生松敬三、川田順造、佐々木明、田島節夫訳) : 構造人類学 (みすず書房) 1978、250 頁参照。

- (23) ポール・ラディン、カール・ケレーニイ、カール・グスタフ・ユング（皆河宗一、高橋英夫、河合隼雄訳）：トリックスター（晶文社）1976、264頁。
- (24) クライストは、許婚に宛てた手紙（An Wilhelmine von Zenge 15. August 1801）の中で、「悪いとはどういうことなのでしょう？絶対的に悪いとは？この世の物事は幾千にも結び合わされ、絡み合わされており、どの行動も幾百万もの行動の源であり、最悪の行動が最善の行動を生むこともしばしばです——。この地上で何か悪いことをなしたといえるのは誰なのでしょう？未来永劫に悪いようなことを——？」（683）と記している。
- (25) 例えば、トーマス・マンは、ニコロを「卑劣な養子」と呼んでいる。Mann: a.a.O., S. 835. ギュンター・ブレッカーは、『『拾い子』は底なしの悪の物語である』と解釈している。Blöcker, Günter: Heinrich von Kleist oder das absolute Ich. Berlin 1960, S. 134. ヨッヘン・シュミットは、ピアキが息子の死を悲しんで泣いている間に胡桃を噛み砕くニコロの「惨めで心ない残忍さ」に言及している。Schmidt, Jochen: Heinrich von Kleist. Studien zu seiner poetischen Verfahrensweise. Tübingen 1974, S. 56.
- (26) Stephens, Anthony: Kleist – Sprache und Gewalt. Mit einem Geleitwort von Walter Müller-Seidel. 1. Aufl. Freiburg(Rombach) 1999, S. 45.
- (27) Stephens: a.a.O., S. 47.
- (28) Stephens: a.a.O., S. 45.
- (29) Vgl. Stephens: a.a.O., S. 46.
- (30) 「存在のなかに充ちる暴力から恐れおののきつつのがれ出るには、人間は〈語り〉にすぎざるほかはないのではないか。〈語る〉ことは存在の暴力を悪魔祓いする根源的な身振りなのではないか。ディスクールと暴力とは背中あわせにはりつけられている。ディスクールの可能性は、暴力の不可能性であり、暴力の可能性はディスクールの不可能性である。」今村仁司：前掲書、40～41頁。
- (31) マルセル・モース（有地亨、伊藤昌司、山口俊夫訳）：社会学と人類学 I（弘文堂）昭和51年、239頁。
- (32) 今村仁司：交易する人間（ホモ・コムニカンス）（講談社）2006、131頁。
- (33) ドイツ語の Gift は、「贈り物」と「毒」を意味する。モースも、「返礼をする義務が遵守されないときには、タオンガ（贈られた物）はその者を殺害する力を包蔵している（括弧内引用者）」と述べている。モース：前掲書、237～238頁。
- (34) Vgl. Goethe, Johann Wolfgang: Italienische Reise. In: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe. Hrsg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert, Norbert Miller, Gerhard Sauder und Edith Zehm. München(Hanser) 1992, Bd. 15, S. 572-607.
- (35) ミハイル・バフチン（望月哲男、鈴木淳一訳）：ドストエフスキーの詩学（ちくま学芸文庫）2000、247～250頁。
- (36) Vgl. Müller-Salget, Klaus: Das Prinzip der Doppeldeutigkeit in Kleists Erzählungen. In: Kleists Aktualität. Neue Aufsätze und Essays 1966-1978. Hrsg. von Walter Müller-Seidel.



Darmstadt 1981, S. 189.

- (37) バフチン：前掲書、248 頁。
- (38) ドイツ語の Narr は、「(宮廷のお抱え) 道化師」をも意味した。
- (39) 逆説性を導入するのは、ピアーキの言葉や身振りばかりではない。ピアーキが「デル・ポポロ広場」で「全く静かに」絞殺される (215)、というのも逆説的である。「デル・ポポロ広場 Platz del popolo」が、「民衆の広場 Platz des Volkes」を意味するのに対して、「ピアーキは、民衆のいないピアッツァ・デル・ポポロ Piazza del popolo で絞殺される」からである。Vgl. Dyer, Denys G.: Kleist und das Paradoxe. In: Kleist-Jahrbuch 1981/82. Im Auftrage des Vorstandes der Heinrich-von-Kleist-Gesellschaft. Hrsg. von Hans Joachim Kreutzer. Berlin 1983, S. 214.
- (40) バフチン：前掲書、248～249 頁。
- (41) Vgl. Mann: a.a.O., S. 836.
- (42) Schröder, Jürgen: Das Bettelweib von Locarno. Zum Gespenstischen in den Novellen Heinrich von Kleists. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift 17(1967) S. 203.
- (43) Vgl. Benjamin, Walter: Zur Kritik der Gewalt. In: Zur Kritik der Gewalt und andere Aufsätze. Mit einem Nachwort versehen von Herbert Marcuse. Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1971, S. 57ff.